

木製家具

我が国における家具の代表的産地は、福岡県の大川市、徳島県の徳島市、広島県の府中市、北海道の旭川市と静岡市など十数か所があげられます。

静岡県内の家具生産地は、静岡、藤枝、島田、沼津、御殿場など市部で、その大半は静岡市と静岡市内企業が工場団地として進出した藤枝市や志太郡大井川町、同岡部町に集中しています。

静岡の家具で、最も古い歴史をもつのは鏡台です。その源は漆器で、漆器作りで培われた伝統的技術、技巧が鏡台作りに活用されました。

静岡鏡台は、明治 18 年（1885）、岩本庄吉からの発注を元に石川房次郎が製造した「西洋鏡台」に端を発します。その後、職人であった石川が「富貴塗（ふうきぬり）」と呼ばれる製法を考案し、岩本が東京市場に販路を広げました。

富貴塗とは、キハダを使用して木地に茶黄色の漆仕上げをする製法で、石川は他にも「波状鉋削りによる木目顕出法」の特許を取得しています。

大正時代になると、箆笥（たんす）・椅子（いす）などの家具も作られ始め、木製家具産地の様相を濃くしてきました。

鏡台は、生活スタイルに合わせた製品作りをしていく中で、昭和 20 年代の座鏡から 30 年代は三面洋鏡台、40 年代にドレッサーへと変遷していきました。

昭和 30 年代以降は、サイドボードという新商品が開発され、「鏡台」と「サイドボード」が静岡の家具の代表となっていきました。

この頃から、サイドボードのほかに、食器棚や書棚の生産も増えはじめ、箆笥、キャビネット、下駄箱などの箱物類、応接セット、スツール、食堂セットなどの脚物類、その他小物家具など多種多様な家具を生産するようになり、かつての鏡台産地から総合家具産地に変貌を遂げたのです。

静岡の家具は、高度経済成長の旺盛な家具需要のもとに、多種多様な家具を生産する一大総合家具産地を形成し、静岡市の地場産業の中で重要な位置を占めるまでになりました。